Christmas Songs
クリスマス・ソングス

Eddie Higgins Trio
エディ・ヒギンズ・トリオ

1. レット・イット・スノウ
Let It Snow《Trad》(3:36)
2. ザ・クリスマス・ソング
The Christmas Song《Torme - Wells》(5:10)
3. クリスマスは家で
I'll Be Home For Christmas《Cannon - Kent - Ram》(4:24)
4. 世の人忘るな
God Rest Ye Merry Gentlemen《Trad》(4:30)
5. サンタが街にやってくる
Sant Claus Is Coming To Town《Coots - Gillespie》(3:29)
6. ベツレヘムの小さな町
O Little Town Of Bethlehem《Trad》(4:44)
7. メリー・リトル・クリスマス
Have Yourself A Merry Little Christmas《Martin - Blane》(4:14)
8. クリスマス・ワルツ
The Christmas Waltz《Cahn - Stryne》(3:20)
9. ホワイト・クリスマス
White Christmas《A. Berlin》(4:38)
10. ウィンター・ワンダーランド
Winter Wonderland《Smith - Bernard》(6:11)
11. ひいらぎを飾ろう
Deck The Hall Boughs of Holly《Trad》(3:37)
12. そりすべり
Sleight Ride《L. Anderson》(3:48)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins《piano》
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart《bass》
ジョー・アシオーネ Joe Ascione《drums》

録音：2004年7月7、8日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

Ⓟ Ⓒ 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at Avatar Studio in New York on July 7 & 8 , 2004.
Engineered by David Darlington.
Mixed and Mastered by Venus 24bit HyperMagnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Cover Art : © Meredith D'Ambrosio.
An Eggshell Mosaic " The Charles ".
Artist photos by John Abbott. Designed by Taz.

「楽しき哉　クリスマス曲集！
ピアノの名手エディ・ヒギンズの遊び心が嬉しい」　　岩浪洋三

この原稿を書いているのは9月の中旬。冷房をつけていないので、部屋の中は暑く、Tシャツ一枚で机に向かっている。しかし、クリスマス曲集を聴いていると、なんとなく涼しい風が吹いてくるようで、気分は爽快である。それにもうみんなクリスマスや年末、さらには来年の準備をする季節なんだなあという実感が湧いてくる。そういえば、テレビでは今年の年賀状の発売枚数を発表したりしていた。

ぼくがいちばん早くクリスマス・ソングのライヴを聴いたのはもう10年ほど前になるだろうか。JVCジャズ祭ニューヨークを6月下旬に聴きに行ったとき、カーネギー・ホールでヴォーカリストが何人か出るコンサートがあったので聴きに行った。出演者の一人にメル・トーメがいた。彼は何曲かスタンダードを歌ったあと、今から恐らく世界でいちばん早くクリスマスの曲を歌いますと、ユーモアを交えておしゃべりをして、自作の「ザ・クリスマス・ソング」を歌った。会場からは大きな拍手が巻き起こった。ぼくはこの歌が好きで、ナット・キング・コールが歌ったものがいちばんだと思うが、この歌が入っているアルバムはつい買いたくなってしまうのだ。嬉しいことに、本アルバムのエディ・ヒギンズ・トリオも2曲目で「ザ・クリスマス・ソング」を演奏している。クリスマス・ソング集ではこの曲が入っていないと、ぼくなどがっかりしてしまうのだ。

ところで、近年はジャズメンが演奏したクリスマス・ソング集もたくさん発表されるようになったが、昔はあまりなかった。ぼくが初めて聴いたジャズ・クリスマス集はCBSの「ジャズ・クリスマス」だった。デューク・エリントンやデイブ・ブルーベックまでが演奏していて楽しく聴いたものだ。ユーモアや遊び心を理解するジャズ・ファンなら、ジャズ化したクリスマス・ソングを歓迎するはずだ。かつてあのチャーリー・パーカーもクリスマスの夜の“バードランド”だかでのライヴで「ホワイト・クリスマス」を演奏していて嬉しくなったものだ。

日本でも最近はずいぶん早くからクリスマスの飾りつけをするようになったが、数年前に11月末から12月の初めにニューヨークに行ったとき、12月に入ったらもうクリスマス・ツリーを飾り、街角に赤い衣装を着たサンタクロースのおじさんが立っているのには驚いた。その上12月1日というのに雪が降り、一時吹雪いてきたりしたので、クリスマス気分が味わえたものだった。アメリカではクリスマス・ホリデイがあり、みんなクリスマス・プレゼントを買うために街に出るので、目抜き通りやデパートは一層にぎやかになる。

ピアノのエディ・ヒギンズは大ベテランであり、かつてシカゴで長くクラブに出演したので、クリスマス・ウイークにはきっとクリスマス・ソングを演奏してきたにちがいない。だからこのアルバムの曲もほとんどのものは、たびたび演奏してきたにちがいない。だからというべきか、どの曲もツボを心得ていて、原曲のよさや魅力を十分に生かしながら、それでいて、しっかりとジャズに仕上げている腕前に感心してしまった。これこそベテランの味というものなのだろうか。しかも、スインギーでロマンティックなエディ・ヒギンズの個性もにじみ出しており、クリスマス・ソング集はコンピレーションもいいが、本作のように1人のミュージシャンが演奏したものは、統一感があり、より落ち着いて聴けるよさがあるように思う。

さて、最近の日本では、クリスマスをどのように過ごすのだろうか。本アルバムの3曲目に「クリスマスは家で」I'll be home for Christmasというナンバーが演奏されているが、最近の日本人のクリスマスの過ごし方を表しているような曲だ。家庭のある人は、近頃は家族みんなで、チキンだか七面鳥だかを食べながらの団らんというスタイルが多いのかもしれない。そして、若いカップルはしゃれたホテルで、西洋料理にワインとしゃれ込んで過ごす人も多いのではなかろうか。

ところが、ぼくのような昭和一ケタ生まれの男たちは、'60年代の中頃までは、クリスマス・イヴにはホステスたちに押しつけられたクリスマス・パーティ券を買って、夜の銀座のキャバレーやクラブを友人たちとはしごしながら飲み歩いたものだった。先のとがったクリスマス用の帽子をかぶって、銀座通りを酔っ払って歩いている男性たちをよく見かけたものだ。ぼくもその一群の一人だったことはいうまでもない。その頃、たぶん'60年代の初めだったと思うが、忘れられない想い出がある。友人たちとクリスマスの夜、銀座のクラブで飲んでいたら、ひょっこり、石原裕次郎が仲間と飲みにやってきたのだが、しばらくたつと、なんと裕次郎がステージに上り、ジャズ・バンドの伴奏で「ホワイト・クリスマス」を歌ってのけたのだ。大歓声が巻き起こったことはいうまでもない。ビング・クロスビーやパット・ブーンの「ホワイト・クリスマス」もいいが、裕次郎の味のある歌も忘れられない。エディ・ヒギンズもこの曲をちゃんと9曲目で弾いてくれる。ピアノ・トリオによる演奏も軽やかにスイングして、心にうるおいを与えてくれるし、落ち着いた雰囲気があってとてもいい気分だ。この曲の魅力はなんといっても、クリスマスの楽しさを夢見させてくれるところにあるように思う。とてもロマンティックな曲なのだ。同名の映画があり、好きで何度も観たが、もちろんビング・クロスビーが歌い、ローズマリー・クルーニーも楽しげに共演していた。クルーニーに会ったとき、彼女は「私の出た映画でまともなのは、この映画だけよ。あとはみんな愚作よ」といっていたが、たしか彼女が出演した平凡な映画に『レッド・ガーターズ』というのがあった。それでもロージー（彼女の愛称）が好きなので、アメリカでビデオを買ってきた。

エディ・ヒギンズはどの曲も楽しげに、ときにはユーモアのセンスも加え、いつも一人で聴くのにぴったりの調子とは少し変えて、家族みんなでクリスマス・パーティで聴くのにふさわしい遊び心も加えて弾いている。まさに大人の心憎い芸というべきだが、共演のジェイ・レンハート（ベース）、ジョー・アシオーネ（ドラムス）もセンスのいい共演ぶりとバックアップで、エディをもり立てている。

1曲目の心地よくスイングする「レット・イット・スノウ」を聴いたとき、これはいけると思った。これは“雪よ降れ降れ”といった意味の題名だが、この頃、毎年暖冬気味でクリスマスになかなか雪が降らないのは残念だが、クリスマスはやはり12月が寒い北半球がお似合いだ。

軽快にスインギーに演奏することで、曲の面白さが生かされるのが「サンタが街にやってくる」だろう。J.フレッド・クーツが1934年に作曲した比較的新しい曲で、'50年代にドリス・デイが歌ったレコードを楽しんだ想い出がある。

「ベツレヘムの小さな町」や「メリー・リトル・クリスマス」には敬けんなムードがあり、前者はトラディショナルで、ベースにアルコ・ソロも効果的だ。後者は可愛いメロディが印象的だが、ジュディ・ガーランドが主演した1944年の映画『ミート・ミー・イン・セントルイス』で歌われたもので、ヒュー・マーティンとラルフ・ブレインが作詞・作曲した。

「クリスマス・ワルツ」はサミー・カーン、ジュール・スタインというユダヤ人コンビが書いたきれいなワルツの曲。

「ウインター・ワンダーランド」は軽快で楽しい曲なので、ジャズ化にはぴったりだ。1934年にリチャードB.スミスが作詞し、フェリックス・バーナードが作曲したポップ・チューンとしてのクリスマス・ソングだが、1950年にアンドリュース・シスターズが歌ったレコードがベスト・セラーになっている。そのためだろうか、ぼくなど'50年代によく聴いた記憶がある。エディ・ヒギンズもスインギーに弾いており、最後はカウント・ベイシー調の弾き方で終えるなど、しゃれた、ユーモアたっぷりの演奏になっている。

「ひいらぎを飾ろう」はトラディショナルだが、ひいらぎもこの曲もクリスマスのムードを高めるにはなくてはならないものだと思う。ひたすらクリスマスの気分にひたりたいと思う。

「そりすべり」はアップ・テンポで弾き、エディ・ヒギンズが思い切りジャズ・ピアニストぶりを発揮してくれるので、うれしい一曲になっている。1948年にリロイ・アンダースンが作曲したもので、のちのあの「スターダスト」のミッチェル・パリッシュが詞を書いて歌にもなった。ミッチェル・パリッシュといえば、1980年代にニューヨークで自分の詞で歌う「スターダスト」を聴いたことがある。歌ったあと、歌手のマキシン・サリヴァンとステージ狭しと踊りまくっていた姿が忘れられない。ちなみにリロイ・アンダースンの作曲といえば、'50年代に流行った「ブルー・タンゴ」や「シンコペイテッド・クロック」も有名である。

以上12曲、エディ・ヒギンズ・トリオは緩急自在に弾き分けて楽しませてくれた。彼のピアノ・トリオの番外編としてみごとな出来であり、同じシカゴで活躍していたピアニストでも、ラムゼイ・ルイスが43年前に録音した「サウンド・オブ・クリスマス」よりも、エディ・ヒギンズの本作のほうがずっと気品というものがある。やはり何を演奏しても、人間性や人柄はちゃんと表れるものなのだろう。このアルバムの中には、あの愛聴してやまないエディがほほえみながら存在しているのである。